

第3回

講演者：李義鍾氏（東京大学 特任准教授）

講演題目：韓国語の真景：コーパスが知っている私たちの知らないこと

日時：2022年12月16日（金） 午後6時30分～8時

【講師プロフィール】

東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究専攻特任准教授。

専門は現代韓国語文法、言語類型論、コーパス言語学。ソウル大学校国語国文学科学士、碩士、博士(文学)。ソウル大助教、ソウル大・世宗大 同徳女子大・カトリック大講師歴任。

主な論著に『한국어 연결 어미의 레지스터 분석(韓国語連結語尾のレジスター分析)』(2020)、「레지스터 분석 방법론에 기반한 한국어 수량 표현 어순 연구(レジスター分析方法論に基づく韓国語数量表現語順研究)』(2021)、「한국어 '-지(요)', '-잖아(요)'의 조건 표지 용법과 그 기능의 획득(韓国語'-지(요)', '-잖아(요)'の条件表示用法とその機能の獲得)』(2022)、「한국어 동사 '떠다', '펼치다'의 다의성과 의미 확장 기제(韓国語動詞'떠다', '펼치다'の多義性と意味拡張機制)』(2022)などがある。



司会(六反田豊氏)：それでは時刻になりましたので2022年度の第三回の東京大学コリア・コロキウムを始めます。

本日は東京大学特任准教授でいらっしゃいます李義鍾先生に講演をお願いいたしました。まず李義鍾先生について、ご紹介を申し上げます。李義鍾先生は現在、私共の研究室、東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室の特任准教授を務めていらっしゃいます。ご専門は韓国語学で、具体的には現代韓国語文法、言語類型論、コーパス言語学をご専門にされています。ソウル大学で修士、博士を終えられて、韓国でいくつかの大学で講師をなさった後、昨年度から私共の研究室の特任准教授として赴任され、私共の研究室の学生の教育に多大な尽力いただいております。

コーパス言語学がご専門ということで、積極的にその方面の研究を中心になさっていらっしゃいます。今日講演いただくことも先生のご専門、最先端の話になるのかと思います

けれども「韓国語の真景：コーパスが知っている私たちの知らないこと」という題目で講演をいただくことになっております。講演は韓国語でなさいますが、皆さんご覧になっている画面上には、この日本語での講演の内容に関する要略が順次映ることになっております。それから講演が終わったあとの質疑応答は、通訳を通して質疑ができるような形にします。

それでは早速先生にご登壇いただいてお話を伺いたいと思います。李義鍾先生、よろしく申し上げます。

【李義鍾氏講演】

李義鍾氏：はい。こんにちは。ご紹介いただいた李義鍾です。

まず、この講演を席に立たせていただき、大変光栄に思い、皆様に感謝いたします。画面を準備して、今日のテーマを始めたいと思います。

今日準備したテーマは「韓国語の真景：コーパスが知っていて、私たちは知らないこと」です。少々大ききなタイトルをつけてみたのですが、スタートだけでも大きくしたくて、タイトルを大ききにつけてみたので、龍頭蛇尾のような話になるかもしれません。どのような話をするか一応聞いてみてください。

ご紹介いただいたように、私は韓国語学、その中でも韓国語文法を主に研究しています。広く見て言語学という研究分野に属します。言語学という学問は、他のすべての学問がおそらくそうでしょうが、その中に様々な観点があり、その観点によって学者たちが色々な学派を形成しています。そのような学的伝統によってそれぞれ異なる観点で研究をしています。文法論という領域に範囲を狭めて考えてみても、20世紀の文法論だけでも、歴史言語学からの共時言語学の分化、構造主義と生成主義、形式主義と機能主義、生成意味論と解釈意味論、単層位的分析と多層位的分析、自律性仮説と認知主義、規則論と類推論の対立、あるいは論争、あるいは分化といった様々な観念の対立と共存がありました。現在の基準で考えると、このような対立や分化は、今振り返ってみても意味があると思われる部分もありますし、今振り返ってみるとその当時重要視されていたものが思ったよりそんなに重く考えるほどのものではなかったというものもあります。

今日の講演で私が少し対比したいふたつの観点があります。私が任意に名前を付けた言語学者が持っているふたつの観点です。それは「博物学としての言語学対思弁学としての言語学」ということです。言語学に携わる方ならおなじみのふたつの観点ですが、名前だけは私の任意でつけてみました。このふたつの観念を対比することで、今日の講演を始めたいと思います。

さて、言語学者たちは、自分勝手ですが、大きく博物学者として自分のことを考える人と、思弁学者として自分のことを考える人のふたつに分かれると思われまます。その二人の

性格を簡単に紹介します。

博物学者としての言語学者

まず、博物学者としての言語学者がどのような人なのかからお話ししましょう。博物学者としての言語学者は、言語をこのようなものだと考えています。言語は彼らにとって意思疎通の手段であり、美や感情を表現する手段でもあります。言語は歴史を経て、絶えず変化するものであり、その変化の過程でその言語を使用した人々に知識、知恵のようなものが凝縮されているのです。このような観点から、言語というのは誰も完璧にはできないものです。言語は、上手になるためには絶えず勉強し、自分自身を磨かなければなりません。

例を挙げてみましょう。私は韓国語話者ですが、もし「李義鍾は韓国語が完璧であるか?」と聞かれたら、博物学者的言語学者の観点から李義鍾は韓国語が完璧であるとは言えません。どのような側面でそうなるのか。とても幼稚な例から挙げると、李義鍾は標準韓国語大辞典にあるすべての単語を知りません。そのため韓国語が完璧であるとは言えません。もう少し幼稚ではない例を挙げると、李義鍾は学術論文を書くことができますが、例えば新聞記事は上手には書けません。李義鍾がもし新聞社に入社して初めて新聞記事を書くことを始めたら、現職にいる記者たちがその文章を見て「直さなければならぬことがとても多い」と評価するでしょう。そういう面で韓国語話者の私、李義鍾は韓国語が完璧だとは言えない人で、韓国語がもっと上手になりたいのならこの先も勉強し続け、韓国語を磨いていかなければなりません。その言語にある単語や、音韻や、表現はその言語圏にある人々の知恵を凝縮した大切な文化的資源であり、学者ならそれを熱心に収集して記録し、その価値を把握して後世に残すべきです。

このような観点から言語学者は何をする人かということ、自分が知らない、言語学者である自分が、まだ知らない単語、言語表現、言語現象、構文のようなものを探して記録し、

探求する人になるでしょう。これは他の言語、自分が母語にしない他の言語を研究する人と、自分の母語を研究する人と同じです。要するに博物学としての言語学というのは、言語を言語学者の外にあるものと見なしています。言語学者がいれば、言語は外にあります。あっちの方にあります。言語学者がまだ行っていないところにあります。言語学者はそこに行って、その言語を探さなければならないのです。これを比喩的に申し上げるために絵を一枚入れました。

英語圏で類義語辞典をシソーラス(thesaurus)と言いますよね。これはピーター・ロゼ(Peter M. Roget)という人が付けた名前というふうに知られています。シソーラスという「宝物」くらいの語源の意味を持つようですが、なぜこのような名前を付けたのかというと、このロゼという方はもともとディクショナリーの反対になるものを作りたいかっただけです。ディクショナリーというと、単語は分かるけど意味が分からない人を助ける物ではありませんか。単語は分かりますが、その意味が分からなければディクショナリーを探して意味が分かります。では、その逆の機能をする物といえば何か。表現したい意味はあるのに、それがどのような単語を使うのが最も適切なのかがわからない人を助ける物を作りたいということで作ったものです。このような物を作ってからどのような名前をつけるか考えていて、あなたが探すその単語、あなたが探すその表現がここにある、これを開くとそれを見つかることができる。私が作ったこの物があなたの宝箱だ。あるいは宝物の地図だ。という感じでシソーラスという名前をつけたのでしょね。この名前自体が博物学としての言語学を代弁してくれるのではないかとしばらく考えました。言語学者にとって単語とは、各種言語表現とは、句とは、宝物なのです。彼らにとって。あの外にあるもので、振り払って、行って探さなければならないものなのです。ここまでお話したのが、私が対比したいふたつの観点のうちのひとつ、「博物学としての言語学」という観点でした。

思弁学者としての言語学者

言語学の歴史から滔々たる波として流れてきているもうひとつの観点をご紹介します。それは私が「思弁学としての言語学」と名付けたものです。この「思弁学としての言語学」で「言語」とは何かというと、「人間が生まれてから持っている固有の能力」だと考えます。ひとつの言語があれば、その言語にある具体的なひとつひとつの単語、具体的なひとつの構文、熟語、表現も、ある脈絡で重要ですが、それより重要なこと、言語学で究極的に探さなければならないことは、そのようなことを習得して運用する人間の能力だということです。それが本当に言語学者が解くべき言語の謎、言語の神秘だ、と考えます。

このような観点から、思弁学者としての言語学者は、「人間は皆自身の母語の完璧な話者」だと言います。博物学としての言語学とは全く違う観点です。この思弁学としての言語学者は、先ほど例を挙げたように、辞書にあるすべての単語を知っているか、新聞記事を書くことができるか、会社で報告書を書くことができるか、学術論文を書くことができるか、というようには言語能力を評価しません。言語を、母語を、成長過程で習得して語彙を運用し、統語規則を利用して文章を作ることができれば完璧な話者です。つまりそこで単語をもうひとつかふたつ知っているかどうかというのは、この観点では言語能力と無関係なものなのです。この思弁学としての言語学者たちは、このような観点から、ひいては現実の言語資料は不完全だと考えています。「人々が毎日実際に話している言葉は言語を研究する対象資料として不完全だ。なぜなら人は自分が持っている言語能力を毎日の日常で発揮して生きていないからである。自分が使えるすべての語彙、すべての統語規則を毎日使わない、または、自分が知っている統語規則に反する言い間違いもするので、そのような資料は研究対象として適していない」と考えます。そのため思弁学としての言語学者にとっては、実際に人の口から出た言語資料より言

語学者自身が作り出した文章、観念的に作り出した文章がより良い言語資料、研究対象としてより良い資料になります。

さらに、彼らにとって文語というのは口語の不完全な反映です。なぜなら口語は成長しながら自然に習得するものですが、文語はそこから一段階進んで人為的に学ぶことだからです。文字、正書法、そして句読点のような文章を書く上での慣習は人間の言語能力と関係なく、事後的に学ぶことだと考えるので、文語はさらに言語能力から一步離れた、言語を研究する資料としてはそれほど良くない材料になります。

さて、このような観点から言語学者は何をする人なのか。言語学者は自分が使う言葉、概しては自分の母語、その母語の直観に耐性を持って自分の頭の中で考えて、人類が持っている共通の言語能力、そしてその言語話者たちが持っている共通の文法構造を明らかにする仕事をする人だというような観点が今や思弁学としての言語学の観点です。

SNS では、様々な言語学に対する人々の考えを見つかることができますが、そのひとつが思弁学としての言語学の観点をよく示していると思ったので、引用してみようと思います。こういう文がツイッターにありました。「他のすべての学問はまだ知らない答えを探していく過程なのに対し、言語学はすでに完璧な正解を私たちが知っているのに、それが正解である理由を全く知らないとても独特な学問…」という文です。この表現が思弁学としての言語学の観点を非常に雄弁的に示しています。

思弁学者としての言語学者たちはこう考えています。先ほど申し上げたように、「人間の言語能力は完璧だ」、「人間は自分が知っている語彙を使うのは何ら難しくなく、それを結合して文章にするのにどんな困難も経験しない。ただ、私たちが知らないのは、どのような規則がその背後を支配しているのか、どのような文法規則が人の頭の中にあるが故に、それが作用してこういう類型の文章を作り出

すのか。それをまだ言語学者たちは知らない。」頭の中に全部入っているのに、人が全部持ち合わせているのに、ただ言語学者たちがそれを発見して明示的に記述できなかった、と考えます。このような観点の言語学は、結局どのような種類の探求を目指すのかということ、できるだけ実験的な文章、境界的な文章、これが韓国語文法の中で適格な文章なのだろうか、それとも適格でない文章だろうか。もう一步進むと、これは完全に不適格な文章のような文章を作って、文法の限界をテストすることが思弁学としての言語学者たちが主としてする仕事になります。韓国語文法構造の細かい姿を明らかにするために、人々が使わない、現実では使わない言葉でも、使わない文章でも、作って「こういう文章が可能なことから、韓国語文法の細かい部分はこうになっているだろう」を探求するのです。

適格な文章

画面に挙げた例文は、実際に学術論著で使われている例文ですが、この文章を見て、私は「これが韓国語文法で適格な文章なのか」という疑問が湧きました。3 つ例に挙げておきました。「이 학생들에게가 돈이 필요하다.」「저는 민지가 잠을 보았습니다.」「그들에게는 냉담한 선생님들이 서운들 한 것 같았다.」のような例文が実際学会で発表された学術論著に入っています。これらの文章に対する直観は、韓国語母語話者でも少しずつ見解が分かれるかもしれません。しかし私にはぎこちなく感じます。少し「あ、こういう文章が韓国語話者として受け入れられる文章なのか」「実際に存在する文章なのか、韓国語に？」というふうに思います。これを私だけが考えるのではなく、世界の言語学教室では世界中の大学院の言語学教室では、毎瞬間「これが可能な文章なのか不可能な文章なのか」ということを大学院生たちが悩んでいます。そのため、文法学ではこういう冗談が長い間広がっていました。「10 回で読んでみれば適格な文章になる」。一度読んでみると変な文章だと思えたものも、心を開いて 10 回読んで

みると、まあ韓国語にこんな文章があるかもしれないと思うようになる、というような冗談が文法学を学ぶ大学院生の間で交わされたりしました。

これはもちろん冗談ですが、しかしまた重要な真実を含んでいます。「10 回読んでみれば適格な文章になる」ということ。それは何かというと、言語の本質のひとつがそれかもしれないかもしれません。最初に聞いたときにぎこちなく感じた文章も、10 回聞けば受け入れるようになるということ、大丈夫に感じられるということ。なぜなら、言語は意思疎通の手段なので、意思疎通というのは自分の周りの人とすることであり、自分の周りの人が自分の知っている文法規則から外れる文章を書いても、それが 10 回、20 回以上になると自分もそれを受け入れるしかないのです。そんなことが人間の言語生活では起こります。

私自身にもそのような経験が何度かありました。ある流行語のようなものが新しく現れたとき、「私の知っている韓国語の統語規則上到底受け入れられない言語表現だ」と最初は思ったとしても、みんな周りの人がその言葉を使い始め、10 回 20 回それが私の耳に入ってくると、だんだんその拒否感がなくなってきます。「まあそんな言葉を使うこともあるか」と思うようになります。そういうことです。言語は固定されておらず、一人の中でも個人の言語も変化します。

思弁学者のはまりやすい落とし穴

私が大きく「博物学としての言語学」そして「思弁学としての言語学」大きくふたつ、言語学の歴史をふたつに分けて支配してきた思潮を勝手に名付けて紹介してみました。私はまあ、この中でどのような観点をとるべきかという問題については、すぐには答えられないと思いますが、ただ、思弁学としての言語学が持っているもうひとつの問題をお話して、そこからもう少し考えを続けていこうと思います。それは何かというと、言語学者が言語について「私は知っている」と思ったときにはまりやすい落とし穴についてです。

思弁学としての言語学者たちが考えるように言語は、単にまだ学術的に理論化されていないだけで、言語知識自体は人の頭の中に入れて入っています。もちろん言語学者である私の頭の中にも入っています。したがって、私が例文を作って、私が私の仮説をその例文を通じて検証する方式で学術的な探求を進めることができる、と固く信じる時、陥ることのある罠、これが大きく 3 つあると思います。

ひとつ目は「反例に鈍感になる」ことです。私が「韓国語文法はこうだ」という仮説を持っていけば、その仮説を検証しなければならぬのではないのですか？検証しなければなりません。この仮説が間違っているかもしれないではありませんか。すると、反例を挙げてその仮説を検証するのがどの学問でも一般的だということです。「あなたはこの文法、韓国語文法にこういう規則があると言いましたが、あなたの文法規則に反するこういう例文が存在するので、あなたの考えは間違っています」というふうに、反例と反例を投げながら仮説が正規化されるのですね。しかし、研究者である私が「言語についてすべて知っている」と思った瞬間、反例に対して鈍感になることがあります。「もしかして私の仮説が間違っているのではないか」「私の仮説に反対する例文はないか」と頭に浮かぶことは容易ではありません。特に私の仮説がとても自分に魅力的に感じられる時、その瞬間には反例が思い浮かびません。

ふたつ目は毎日言われる言葉たちが看過されるということです。人々が毎日使う、毎日やり取りする、口から出てくる言葉の間に、言葉の中にどのようなパターンが存在するのか。思弁学としての言語学でいう頭の中の非常に深いところに入っている深層的な言語能力以外にも、人々の毎日の言語生活の中で作られ守られているパターンがあり得ますが、言語学者が「自分は言語についてすべて知っている」と考えると、そのパターンに対しても鈍感になることがあります。

みつつ目は、この言語資料に対する差等的な認識を持つことです。「このような例文は文

語体なので、自分が行っている研究とは合わない」、あるいは「このような例文は口語体なので、自分が行っている研究とは合わない」と言語資料を排除することがあります。研究目的によってはそれが適当な場合もありますが、適当でない場合もよくあります。これは講演の後半でもう一度お話しします。

「真景」

それで私がこの講演のタイトルを「真景」と、ちょっと大げさに付けた理由について話をしてみようと思います。朝鮮美術史の「真景山水」というのがありますよね。それまでの山水は理想的な山水を描いていて、謙斎鄭敷の時代になって自分の目に見える山と木と川をそのまま描く風潮ができた、ただ教科書的に私は知っているのですが、その理想的な山水と真景山水の対比がなぜか言語学の思潮にも例えられると思いました。言語は私たちが毎日口から吐き出されるものでもあり、また同時に構造として頭の中に入っているものでもあります。私たちが毎日吐き出す文章ひとつひとつも言語のすべてではなく、また私たちが頭の中に入っていることだけでも言語のすべてではありません。言語学で話す言語はそのふたつを包括するものですが、思弁学としての言語学を行う研究者は、常に頭の中にある理想的韓国語、理想的な言語を研究対象とする傾向があります。理論を展開する上で、そのような理想的な韓国語を使うことが有用であり、必要な時もあります。しかし、理想的な韓国語だけを研究対象にしているので、毎日話されている韓国語を排除することとなり、その結果、私が先ほど申し上げたいくつかの落とし穴に陥る結果を生むことになるかもしれないと考えました。そこで理想的な韓国語の研究に長い間取り組んできた、集中してきた研究者でも、しばらく目を向けて毎日話されている韓国語、収集したままの韓国語、美術史に例えるなら「韓国語の真景」を探ってみるのもいいのではないかと思うようになりました。

私が考える韓国語の「真景」を直視する方

法、あるいは原則は簡単にまとめると3つです。第1に、全数調査を行わなければならない、研究対象となる言語単位、言語学的層位があれば、その一部、ひとつやふたつではなく、すべてを調べるべきであるということ。第2に、研究者自身の頭の中や直観から作り出した言語資料、観念的な言語資料よりは現実の言語データから言語現象を探るのが良いということ。第3に、ひとつのコードだけを重視したり眺めたりするよりは、複数のコードを視野に入れ、観察する、そうした観点が必要であるということ。この3つを考えてみました。今の段階では、何の話だとも思いますが、ひとつひとつ話をしていきます。

私が実際に行った研究をもとに話してみます。ある言語現象を研究するとき、私は、このような言語現象が言語学的に興味深いと思う、この現象についてちょっと探求してみないと、という考えを言語学者がすると、研究に取り掛かります。ところが、多くの言語学者がその現象の全体像について話しているのか、疑わしい議論をすることがあります。私が挙げる例はこれです。言語学でちょっと重要に扱われる言語現象のひとつに、論項交替現象、または項交替現象というのがあります。これは何かというと、ふたつの節や文章が述語は同じですが、その項または論項の格、韓国語文法の中では格助詞です。格だけが異なる現象があります。それを言語学では論項交替現象といいます。例えば、画面に書いておいた例を話します。「시위대가 경찰에 맞섰다」という文章も韓国語にあり、「시위대가 경찰과 맞섰다」という文章も韓国語にあり得ます。述語が同じで、出現する成分、名詞成分も同じですが、格助詞だけ「에」と「과」で異なります。このような現象が韓国語で起こり得ます。このような「에」「과」以外にも、様々な格助詞でこのような現象が起こることがあります。他の言語でもこのような現象が多く発生し、韓国語と構造が非常に異なる、他の言語でもこれと比較されうる現象が起こります。そのため言語学でかなり研究対象と

して重視されている現象です。

私が2017年に行った研究は、この「와/과」の助詞が「에」と行ったり来たり、あるいは「로」と行ったり来たりする現象でした。このような現象について研究したいという欲求が生じ、これをもう少し詳しく見てみようと思うようになりました。ここで一次的に考えるべき考えは何か。この現象の全体を知りたい。この現象の全体を。そして、「에」が「과」と行ったり来たりする現象、「로」が「과」と行ったり来たりする現象がありますが、ではこの現象を起こす動詞や形容詞は韓国語の中にどのようなものがあるのか。韓国語にあるすべての動詞形容詞の中で何がこの現象を起こすのか。そこから分らなければならないのです。しかし、思ったより論項交替に対する研究を遂行した論著の中で、それをせずに始める研究がかなりあります。研究者たちの議論を見てみると、「え？この研究者は、すべての動詞形容詞を見ず、自分の頭に浮かぶ例文だけで議論を進めている」と疑わせる学術論文が言語学界に少なくありません。

では、すべての動詞と形容詞をどのように検討するのか。理論的に理想的に考えると、膨大なテキストを持ってきて、すべての動詞と形容詞をチェックしながら、検討しながら、これは可能だ、これは不可能だ、とひとつひとつ明らかにするのが理想的な研究方法でしょう。しかし、それは少し時間と努力がかかることだと思ったので、これは次にしようと思って、私の研究欲求を解決するための次善策としてこの方法を使ってみようと思いました。それは何かと言いますと、世宗用言辞典を利用することです。世宗用言辞典というのは、2000年代初めに国立国語院が世宗計画という韓国語資料の電算化計画事業をする際に、用言、つまり動詞と形容詞に関するあらゆる種類の情報を盛り込んだ電子辞書を作ろうという下位事業も進めたことがあります。その結果が世宗用言辞典です。これは、一般読者が見つけられる形式の辞書ではなく、電算用の辞書です。機械可読型コンピュータ用辞書です。

画面の右側に映してある、こんな姿で公開されました。この資料の中にこのケースフレーム、この動詞または形容詞はどのような格助詞と呼応するかの情報も載っています。今右側のサンプル側の部分がケースフレームに入れてある部分です。そうすればこの資料を利用できる、世宗用言辞典のすべての資料を持ってきて、その複数のケースフレームを持っている動詞や形容詞から「에」が出現したり、「와」が出現したりするものを電算的に抽出して、どの動詞や形容詞がそのような現象を起こすのかのリストを作って、もし抽出過程で誤りがあったとしたら、それを後処理すれば、この論項交替を起こす全ての用言のリストを得ることができると考えました。すなわちこれは私が考えるリストではなく、世宗用言辞典の編纂者が考えたリストですが、研究の次善策としてこのような観察方法を選びました。その結果得られた用言のリストは、「에」と交代を起こすのが201個、「로」と交代を起こすのが21個でした。このような結果が出ました。

このような結果が出てリストを得れば、次の段階として下位類型の分類ができるようになります。例えば「에」「와」は議論が少し複雑なので、「로」「와」に限定してお話しします。このように結果を得ると、この用言のリストを見ながら、この動詞とこの動詞は意味が似ている、意味が似ているので、やはりケースフレームも似ている、とまとめることができます。すると、この動詞とこの動詞は意味がまったく異なるのに、「로-와」論項交替を起こすという点では共通しているということも分かります。すると、その観察を通じて「로-와」交替を起こす韓国語の動詞形容詞はこのようにまとめることができるのだと考えられることもできます。

その結果、私は今、私なりの観点で5つの部類に「로-와」交替を起こす用言をまとめることができました。こうして初めて可能になることが、これについて研究した他の研究者の主張がどこまで適用でき、どこまで適用できないかを検証することです。例えば、ある

研究者が「로-외」交替を起こす動詞は、このような意味的性質を持っている。とても単純な例を作って話をすると、「로-외」交替を起こす動詞や形容詞は「交換や交替の意味がある」とある研究者が主張した場合、この資料を持ってきてその研究者に「いや、あなたの理論は今の現象に5分の1しか説明できていません」「あなたの理論で説明できない残りの4つの類型があります」というような反論ができるようになるのです。

また、私自身もこの5つを集めて、この5つが持っている根本的な共通点は何か、あるいは根本的な共通点がなければ、なぜ互いに異なることが表面的にこのような似た現象を起こすのかについて語ることができるようになります。この資料が私に問題を投げかけます。このような5つの類型の存在について研究者であるあなたが説明しなさい、と。統合的に説明しようが個別的に説明しようが、これがあなたの目の前に投げ込まれた問題です、と資料自身が私に言うのです。全数を見なければ、おそらくこのような問題を解かなければならないと私は思っていなかったと思います。

この時点で私はこのような考えをしてみようと思います。ある言語学的研究対象を研究することに決めたら、私たちが一次的にしなければならぬ考えはその全体を見ることだ。全体を見てこそ、私が提起する仮説にどのような反例があり得るのか考えることができる。全体を見てこそ、その対象にどのような下位範疇があるのか考えることができる。全体を見てこそ説明しなければならぬ問題が何であるのか分かる。全体を見てこそ、何が中心的な現象で高頻度の現象なのか、何が周辺的で低頻度の現象なのか分かる、という考えです。

「真景」についてのふたつ目の考えについて話してみましよう。2021年に私がした研究についての話をここからはします。韓国語にはある名詞が指す対象があり、その対象の数量を明示する表現があります。だから花(꽃)があって、その花の数量が1輪(한 송이)だ

としたら、「꽃 한 송이」と韓国語は表現できます。しかし、その語順が比較的多様に現れます。「꽃 한 송이」も可能ですし「한송이 꽃」も、「한송이의 꽃」も可能です。これを記号化して、名詞はN、数量詞はQ、単位はU、助詞はG、「꽃 한 송이」はNQU、「한 송이 꽃」はQUN、「한 송이의 꽃」はQUNGと呼ぶことができます。この数量表現の語順について、韓国の研究者の間でかなり長い間特に証明することなしに信じられていた通念がひとつあるのですが、それが何かというと、「韓国語の最もありふれた、代表的な語順はNQUだ」というものです。「꽃 한 송이」である、と。「韓国語の最も自然でありふれた、代表的な数量表現の語順だ」という通念がありました。

私は「これは本当だろうか？」と考えてみました。そこでコーパスを持って抽出して統計を出してみました。高度な統計手法を使ったわけでもなく、ただ数を見ただけです。このグラフで白い棒が「꽃 한 송이」NQUで、灰色の棒が「한 송이 꽃」QUNで、黒い棒が「한 송이의 꽃」QUNGです。「한 송이 꽃」だけ、対象を花だけではなく、すべての名詞を対象に調査をしました。しかし表を見ると、白い棒の長さが圧倒的ではありません。非格式的会話とフィクション会話、これは小説の会話です。フィクション会話だけ白い棒の長さが50%を超え、残りの資料では50%未満で圧倒的ではありません。この資料を見ると、韓国語で数量表現の語順が「꽃 한 송이」NQUの語順が支配的だ、圧倒的だ、主流だとは言えません。しかし、研究者たちはそうだと考え、そういうものだと思っていました。

この数量表現の語順について、昔、同徳女子大学にいらっしゃった蔡琬先生が通時的な研究を行われたことがあるのですが、その研究でどのような議論が行われたかということ、このQUN語順、「한 송이 꽃」または「한송이의 꽃」という語順が韓国語の歴史でずっと増え続けてきた、つまり古代韓国語から中世韓国語、近代韓国語に由来するほど数量表現の語順は「꽃 한 송이」NQUから「한 송이 꽃」

「한 송이의 꽃」QUN、QUGNが増える方向に変化してきたということを観察しました。ところが、この通時的記述の最後の部分がおかしいんです。「한 송이(의) 꽃」QUN、QUGNの量が資料を見ると歴史的に少しずつ増加していくのですが、現代韓国語に来てぐっと落ちた、なくなった、急にまた古代韓国語に戻ってNQUが主流語順になった、というように記述するしかなかったのです、その当時の通念に基づく。そのため当時、蔡琬先生は「あ、これはこのQUN、QUGNの増加は通時的に非常に一時的な現象だったのだろう。何か他の外部要因によって一時的に増えてから、また韓国語の元の状態に戻ったのが現代韓国語だ」というように記述されましたが、今の統計を見るとそういう記述は必要ないですね。QUN、QUGNの語順が歴史的にずっと増加してきており、現代韓国語にもかなり多い。かなりよく使われる、と記述すれば終わりです。これを多くの研究者は疑いませんでした。ただ直観的に「꽃 한 송이(花一輪)」が主流の語順だろうと多くの方々が考えてきたのです。しかし、統計的な資料もそうですし、コーパスの実際の例文を見ても、現代の韓国人が口語と文語を問わず、このQUN、QUGNの語順で数量表現を作り出していることが分かります。

実際の言語資料では、そのような語順がたくさん出てきます。ラジオのインタビューで使われた「몇 번의 선거」「세 분 패널분들」という表現。日常会話で使われた「몇 개 대학」「몇 명 친구들」のような表現、あるいは「한 명 남자 애」のような表現。これはある統制された、人為的な環境で作られたものではなく、実際の言語を使う現場で採集された資料です。こういうものを非常に自然に現代韓国人は使っています。

しかし、このようなものの存在を研究室の中の言語学者は、自分の頭の中にある例文だけで研究する言語学者はあまり思い浮かばなかったように思えます。そこで、ここから私たちが考えられることは、次のように整理することができると思います。韓国語の研究で長い間人々が持ってきた直観的通念、あるいは

は通念的直観があります。当然そうだろうし、当然そうだろうと思ってきたことがあります。あるいは、かつての先輩研究者がこうだと言っていたことを、今の研究者が無批判に踏襲しているものがあります。しかし、今また振り返ってみると、それが事実ではないかもしれません。特に現代ではコーパスの探求が可能なので、コーパスを覗いてみると、実はそれが事実ではなかったということがよりよく現れます。そのようなことに対する何らかの疑い、検討、検証、探求が必要ではないかと考えてみました。

例えば、こういうものは言語学では常識と考えられているものですよ。「韓国語は基本的にSOV語順を持っている」「韓国語はhead-final language(主要部が最後にある言語だ)」、「韓国語は文章内成分の省略が(英語に比べて)容易だ」「韓国語は高文脈言語だ」などの言語学概論の最初のページ、最初のページを開くと出てくるような命題たちがあります。これらのようなことについても疑ってみることができるのではないかと。過去にはこの知識が最善だったとしても、もし今コーパス言語学的探求をしてみれば、また別の結論が出るのではないかと少し考えてみました。

「真景」を探す試み、みつ目は「コードに敏感になること」です。「コード」というのは、個別言語や言語の中に存在する言語変異を合わせて呼ぶ名前です。より簡単な表現、別の表現では言語のバージョンとも言います。「コード」という表現の中には個別言語や方言も入ってしまっていて、いわゆる使用域、registerと呼ぶ、文語か口語か、格式的か非格式的かのような部分も、個人差を反映した文体などといったものも入っています。私が2020年に行った研究が、韓国語連結語尾のレジスター分析というものなのですが、韓国語の文法形態素の中で連結語尾がその言語資料の算出事項によってどのように異なるように使われるのか。ある語尾は口語で、ある語尾は文語でよく使われる、あるいは同じ語尾でもある用法はどこで使われ、他のある用法はどこで使われる、といったような区分があると思うの

ですが、私たちがこのように漠然と知っていることを深層的に見てみましょう、ということでコーパスを 11 種類に分けて頻度を調べた研究です。これは規模がちょっと膨大であった研究なので、その全貌をすべてご紹介することはできず、そこで私が今日話したいことだけ抜粋してお話しします。

韓国語の研究者の間で、言語資料を口語と文語の二分法的な観点から眺めようとした傾向があります。これは研究分野によって少しずつ異なりますが、テキスト言語学の研究者やジャンル論の研究者、一部のコーパス言語学の研究者は、言語資料はこのように単純にふたつに分けられるのではなく、より繊細に多様に分けるべきだと早くから考えていた研究者もいたのですが、その他の研究者は非常に多くの場合、口語と文語のふたつに言語資料を分けて議論を開陳する機会が多かったです。そして場合によっては口語と文語の片方を言語資料として何らかの特権的な地位にあるかのように話したりもしました。そしてさらに口語の中では日常会話の口語が最も特権的な口語で、その他のもの、例えばインタビュー。ラジオや雑誌のインタビュー、あるいは例えば官公庁に電話して問い合わせた内容などは、ちょっと相対的に研究資料としてのレベルが落ちる、2 等資料だ、という考えを持っている研究者も少なくありませんでした。かなり多くの研究者がそのように考えていました。ところで、コーパス言語学研究者や、テキスト言語学研究者、ジャンル論研究者、さらに社会言語学研究者たちは、言語のコードにそのような差等があり得るのか？とそれらすべてが対等な韓国語だと考えることが一般化しました。そのような口語と文語の二分法的観点から現れうる研究の盲点、研究の問題点をひとつだけご紹介します。

言語資料を口語と文語に分けると、口語と文語の中にも様々な種類の言語資料がありますよね。しかし、ある研究者はその一部を取って「準口語」と命名しています。例えば日常会話で録音されて転写された資料は正統口語、純粋口語で、小説の文章は、小説の会話

文、演劇の台本、あるいはドラマのセリフなどは完全な文語でもなく、完全な口語でもなく、その中間あたりにあるものだから準口語だ、と呼びます。コーパスを作る段階で、準口語コーパスという名前を付けて作る、そんな機関もあります。このようにすると、どのような問題が発生するかというと、このような種類のテキスト、小説の対話文のようなテキストは口語と文語の中間にあるという観点を、資料を見る前から持って始めます。そうするとどのように考えるかということ、口語というものが持っている口語性が 100%なら、この小説の文章は口語性を 80%持っているだろう、この演劇の台本は口語性を約 70%持っているだろうというように口語より劣った、口語が持っているある性質を一部欠いたものとして眺めることとなります。

しかし実際の小説文章は、実際的小説文章、演劇台本などをコーパスで見ると、日常会話的口語、あるいは新聞やニュース記事のような完全な文語テキスト、このふたつの間ではなく、これらを超える第 3 の性質を持っていることが分かります。短く紹介します。連結語尾「(-으)면서」は相手を非難、詰難する時に用いる用法がありますが、この用法は小説で 1 番多く出てきます。連結語尾「-느니」はある選択を排除し、ある選択を支持する用法として使われることがありますが、小説の文章で最も高い頻度で出てきます。連結語尾「-길래」は話者が知覚したある事態に対する反応を表す時に用いられることがありますが、小説の文章で最も高い頻度で出てきます。他のどの資料よりも小説の文章で最も多く現れます。文語からまだ完全な口語になっていない、文語と口語の中間に存在するものではなく、日常会話的口語、そして文語。彼らがすべて持っていない第 3 の性質を小説の文章が持っています。そして、準口語という用語で研究する研究者は、これを捉えることができない可能性が甚だ高いです。

要するに、コードに敏感でなければならぬ理由は次のように考えられます。韓国語環境で作られた韓国語資料はすべて対等な韓国

語資料です。平等な韓国語資料です。一等言語資料、二等言語資料に分けられるものではありません。そして、文語と口語、格式体と非格式体のような二分法的な観点で言語資料を分け、この資料はその中間にある、というような前提では捉えられない言語現象が実際の言語資料には非常に多いです。

こうやって整理できると思います。言語の本当の風景を見たいと思う研究者なら、いろいろ考えなければなりません、私の考える、念頭に置くべきことは、3つくらいです。第1に、研究対象範疇の構成員全体を視野に入れて研究しなければならない。第2に、ある通念的な直観、そして研究者の頭に稲妻のように浮かんだ考えは排除し、実際に使った言語でその考えを検証しようとする態度が必要である。第3には、様々なコードを全て視野に入れ、その固有の個性を考慮し、これらのコードを全て対等に考慮する観点が言語を眺めるのに必要である。このような観点を持たば、私たちが韓国語の本当の風景にもう少し近づけるのではないかと考えてみました。

はい。ここまでにします。ご静聴、ありがとうございました。

【質疑応答】

司会 (六反田豊氏) : どうもありがとうございました。先生の研究対象である韓国語、言語というものに対する向き合い方や、博物学としての言語学、そして思弁学としての言語学のふたつの観点を使って専門外の聴者にもわかりやすくご講演いただきました。これから質疑応答に移ります。それではよろしく願いをいたします。

質問者 1 : 博物学としての言語学、そして思弁学としての言語学のふたつの観点で言語学についてお話をされていましたが、お話を聞いてみると文法や語順ではなく、単語や助詞、このような言語を構成する要素を絶対的なものとして、完璧なものとして見ている、というそういう印象を受けました。しかし、

そのような言語を構成する要素自体を懐疑的に見る観点はなかったのだろうかということに疑問に感じて、その語順や文法に対する疑問ではなく、単語、助詞などに対する懐疑的な観点があれば、それをお聞きしたいです。

またもうひとつ質問があるのですが、何か絶対的なことのように見ている概念が、そのように作られる過程が単純に気になりました。どのようにしてそれを人々が絶対的なものとして、あるいは完璧なものとして認めたのか。その過程がどうだったのかお聞きしたいです。

李義鍾氏 : 質問で私がちよっと完全に理解できなかった部分があるのですが、私が博物学としての言語学と、思弁学としての言語学、私の任意でふたつに分けてお話ししましたが、そのふたつのうちのひとつの観点に対する質問なのか、それとも両方を合わせておっしゃっているのかちよっとわかりませんでした。

質問者 1 : そのふたつを合わせて、私が個人的に感じた感想なのですが、博物学としての言語学、そして思弁学としての言語学のふたつとも言語を完璧なものとしている感じがしました。言語が完璧にあって、それを人間がどのように解釈するのか、あるいはどのように探していくのか、どのようにそれを使うのか、このように認識しているという気がして。そう思いました。

李義鍾氏 : 質問ありがとうございます。頂戴した質問はふたつとも私が本日申し上げた、博物学としての言語学と思弁学としての言語学の区分ではなく、言語学でまたよく語られる大きなふたつの思潮の区分である、科学としての言語学と処方としての言語学の区分と関連があります。ですから、言語を眺める視覚の伝統において、長い間存在したのが処方としての言語学です。処方としての言語学というのは何かというと、言語があればより良い言語があり、そしてまた悪い言語があり、

悪い言語を良い言語に矯正しなければならない。どのようにすれば矯正がうまくできるのか、あるいはどのようにすれば良い言語を科学的によく見つけることができるのか、学術的に見つけることができるのか、このような観点から言語を眺めることです。その対蹠点にあるのが科学としての言語学。どの言語が規範的に良いか悪いかはひとまず判断せず、言語をありのまま、人々が使っているまま受け入れた後で、その体系、構造、内容について探求しようという観点です。そのように大きくふたつに分けることができます。私が申し上げた博物学としての言語学も、思弁学としての言語学も、どちらも科学としての言語学を追求する観点に属します。これらはある言語が良い、ある言語が悪いと判断せず、現実に存在する言語が、存在するそのままが、ひとまず私たちの研究対象だ、と考える観点から言語を研究します。ですからそのような観点を持っているので、質問した先生は「すでにある言語をすべて肯定し、完璧なものとする考えを持っているのか？」と思われるかもしれませんが、それは他の言語に例えるなら、例えば社会科学といえば、「存在する社会像をありのままに把握しよう」という研究者がいるかもしれませんが、「把握はすでに十分にできているので、社会をどのように改善するかについて研究しよう」という研究もありません。しかし、前者の研究者だからといって、その人が現存する社会構造をすべて肯定しているわけではないでしょう。ただありのままを知ることが研究者にとって今最も重要な研究課題だと思っているだけです。言語でも、今私が紹介した言語を眺める観点もそれと似ていると思っています。

質問者2: 発表とても興味深く拝聴しました。質問がふたつあるのですが、まず博物学としての言語学、そして思弁学としての言語学、このふたつの名前が面白いですし、どうやってこのような名前を考えられたのか気になりますが、その博物学という名前を聞いた時に

真っ先に思い浮かんだことがあります。それが何かというと、言語学という学問が東京大学で初めてできた時、名前が言語学ではなく博言学、博物館の博と言語の言。博言学という名前でした。それが後に言語学に変わったのですが、おそらくその時は歴史言語学が中心で、また一方では世界の言語に対する類型論的な見方のようなものもあったと思うのですが、それで今日おっしゃっていた博物学とも何か関連があるように見えるのですが、いかがお考えか、というのが最初の質問です。

そしてふたつ目の質問は博物学としての言語学について、言語というのが意思疎通の手段で、また美、感情の表現手段だということですが、大体私もまあ誰が考えてもそんな風に言えるとは思いますが、私が思うに美、美的な部分について私はそんな考えをしたことがないと思って、今後もそのように考える可能性はないと思うのですが、どこでその美という部分が出てきたのか伺いたいです。

李義鍾氏: 博言学と言ったという事実は、今初めて聞いたので、何か心の中にスパークが起こるような、とても興味が湧く話をしてくださってありがとうございます。物理学者ラザフォードが「物理学以外のすべての学問は切手収集に過ぎない」と言ったといいますよね。その話を聞いて「やっぱり物理学が1番だよね」と反応する人もいますし、あるいは「切手収集が何だっていうんだ」と反応する人もいます。あるいは切手収集を頑張らないと物理学にも到達できないっていうんじゃないの？と言う人もいます。学問をする理由は学問分野ごとに違うし、研究者ごとに違うと思いますが、視野に入ってきたものを熱心に収集すること自体も重要ですし、収集する過程である一般化を図ることも重要ですし、そのような観点から少し昔の表現かもしれませんが、「博物学」という研究対象を呼ぶのが本発表の趣旨からしても適切だという考えから、そのように名前を付けてみました。

ただ、私がこの講演に限られた時間で内容を圧縮して展開したので、博物学としての言語学の観点もそうですし、思弁学としての言語学の観点もそうですし、実際には言語学の歴史に存在した様々な研究者の考えをつなぎ合わせた、べたべたと連結したキメラのような姿が含まれていますが、「美」という側面は主にロマーン・ヤーコブソンのような方々の言語観の影響を受けて、本発表資料に入れました。ヤーコブソンのような方々は、文学研究者が言語について知らないのもよくないし、言語研究者が文学について知らないのもいけない。それぞれ各自がお互いの重要な部分だという考えを深く持っていて、それで彼自身が言語学者でありながらまた文学評論家として活動したりもしたではありませんか。そのような側面からの考えが私の講演資料のその「美」という単語に含まれています。

司会 (六反田豊氏) : はい、ありがとうございます。チャットに質問がきています。

質問者 3 : 興味深い発表を聞かせていただきました。私も似たような観点と立場から研究をしていて、嬉しいです。少し言葉遊びのような質問かもしれないのですが、思弁的な立場の言語学者たちは、言語の真景というものをその外観ではなく X-ray、X 線で見えた言語の骨格のようなものと見るのではないかと考えました。

李義鍾氏 : はい。似たような観点と立場で研究をしていらっしゃる聞いて、私もとても嬉しいです。質問は「言語の真景というのを、思弁的な立場の言語学者たちはレントゲンで見えた言語の骨格のようなものとして見ているのではないか」という風に考えました。外見ではなくて…」ということで、とても深い意味

を含めた質問だと思ったので、私も比喻で答えようかと思います。私が今、研究者の名前が正確には思い出せないのですが、三重螺旋という本を書いた生物学者がいます。正確にお名前が思い出せないのですが。その方がおっしゃった話が「以前の生物学者たちが生物研究において DNA の役割を過度に重視した。DNA が生物のすべてだ。遺伝的情報がその生物について私たちにすべてを物語っていると既成の生物学は考えましたが、実は生物は生まれて自分が置かれている周辺環境によって体高が高くなったり低くなったり、健康に暮らしたり病気になったり、様々な条件によって変貌しますよね。結局、その生物の生と死は DNA だけで予測されるのではなく、その生物が置かれている周辺環境から影響を受けるもので、最終的にその生物が死ぬ時に持っている身体的特徴は DNA では全く分からない、予測できない、そういうものだ、という話なのですが、そんな比喻を言語学に持ってくることもできると思います。ですから、思弁的言語学者が DNA が重要だと考える方々なら、私が考える「真景」に対する探求は、それを含めてそれが置かれている周辺環境との相互作用まで合わせて見なければならぬものなのです。このように考えました。

司会 (六反田豊氏) : はい、ありがとうございます。それでは 20 時をすぎましたので、本日の李義鍾先生のご講演はここまでということにさせていただきますと思います。

李義鍾先生、どうもありがとうございました。

これをもちまして今年度の東京大学コリア・コロキウムは予定していたもの全て終了ということになりました。ご参加いただきました先生方、皆さんもありがとうございました。